

鮮やかな真紅のナナカマドの実

小 関 栄

倉馬の里の山野にはナナカマド(七竈)の木が多く自生している。バラ科の木であまり大きくならないので、普段は外の雑木の中に埋もれて目立たない。葉はウルシに似て細長く鋸歯の小葉が枝の両側に広がっている。初夏にはその枝先に白い小さな花が咲く。それが次第に小玉となり、晩秋に南天の実の様に真っ赤になる。しかもその実が葉っぱの上に群がり固まって、一見鮮やかに紅葉したように一際美しくよく目立つ。(上はそのナナカマド)



この木は硬くて腐り難く細工物にはよいが、中々燃え切らない。七度竈に入れてもまた焼け残る木と云うことから名付けられたようだが、この木を窯に入れて七度焼くと良い炭ができるから名付けられたともいう。

因みに漢語名では薔薇科の七度竈 しちどそう **qiduzao** である。

小鳥呼ぶ 赤鮮やかな ナナカマド 淡水

布マルチ農法に転換

松井道夫

はなの村は今年目標に、初馬地区での布マルチ栽培普及を挙げた。私は今まで、掛川市西部の細田という所で友人の田を借りて、稲作をしていた。その土地は、3反半もあり、無農薬で栽培するには、雑草との戦いに明け暮れていて、持て余し気味だった。昨年はずいぶんそのうちの1反に絞込み、無農薬の自然農法で取り組んだ。残りの土地は、雑草の処理程度で荒れるがまま、(ごめんよ)と思いつつも耕耘機を1台導入してなんとか1反の田に関しては形を保つことができた。布マルチでやるには、水の管理が不十分だったので断念していた。ところが、その土地が売れそうだから、返し、新たな田を捜していた。初馬地区には荒れ地もある。本来布マルチ農法は「条件のよい土地で、水管理のきちんと出来た田圃で初めてくれたら……、なのにみんな実験するのは条件の悪い田ばかり選ぶ。」という津野先生の嘆きを聞いている、布マルチ農法考案者の歯ぎしりは十分すぎるほどにこたえた。条件のいい土地でこそ布マルチ農法なのだ。初馬地区は水管理に関しては十分である。まさに布マルチでの成功例を私がやって見せようではないか、と決意した。どこかその条件に適合する土地はないかと捜している。小関さんから「俺の土地は？」とありがたい話があったが、水条件の点で一寸躊躇している。誰か、適当な田を知らないか。